

シリーズ

“キラリ企業”

の現場から 第50回

会社のさまざまな支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業”の現場から。第50回目は、顧客からの注文に対して職人技で応える企業、有限会社望月塗工研究所(大田区)をご紹介します。同社は公社の異業種グループ「城南ブレインズ」のメンバーとして活躍しています。

お客さまから「ありがとう」と言われる企業を目指して

有限会社望月塗工研究所

1. 沿革と技術力

有限会社望月塗工研究所は、前身である望月塗装所(大田区糞谷)として、祖父が昭和28年から金庫、放送用具の部品(鋳物)などの吹き付け塗装を行う塗装業から始まった。その後、昭和42年に父親が当地(大田区大森中)に有限会社望月塗工研究所として法人化し、昭和30年代から行っていた焼付塗装を中心とする業態が定着した。現在の社長である望月直人氏は大学を卒業するとすぐに入社し、39歳になった平成18年6月から社長に就任。現在に至っている。



作業風景

同社の焼付塗装は、基本的に1人の職人が木ベラによるパテ(くぼみ、割れ、穴等の欠陥を埋める下地処理の際に用いられる

ペースト状の塗料)塗りから塗装までの全工程を一貫して担当する。加工に使用する木ベラも職人自身が製作し、パテも独自に調合したものを工夫して使用している。他社に比べてパテを厚く塗ることができ、加熱しても割れたり、はがれたりしない。さらに、発注元のスペックのとおり塗装が出来ていることを証明するため、膜厚計で計測した検査表や塗装風景を撮った写真などを製品に添付して納品している。また、製品が海辺で使用される場合には、東京都立産業技術センター城南支所で塩害試験を行った結果も添付するなど、品質管理を徹底している。こ

うした地道な努力や工夫が顧客の信頼確保につながり、口コミによりその顧客は工業製品、カメラ関係部品、車関係部品など様々な業種、地域も埼玉県、神奈川県、静岡県、大阪府、さらにイタリア在住の日本人デザイナーまで広がっている。

2. 環境への配慮(地域住民との共存)

有限会社望月塗工研究所として創業した昭和42年当時、周りには切削加工やプレス加工を行う町工場が数多くあり、同



工場の外観

業者もあった。その後、円高やバブル経済の崩壊などによる不景気に見舞われた。また望月氏が社長に就任してからも、リーマンショックによる全世界的な不景気に巻き込まれることになった。同社も苦しい経営状態が続いたが、人のいやがる面倒な仕事や難しい仕事も受注するなど必死の努力で何とか乗り切ることができた。しかし、気がつけば周りの工場は少なくなり同社もマンションに囲まれるという環境に変わってしまった。マンションに入居してきた住民で「塗装工場が隣にある。子供たちの健康は大丈夫か」と心配した人もいたそうだが、①有毒性の高い塗料や臭気のでる塗料は使用しない。②土・日は休業、平日の就

業時間は午前8時30分～午後5時30分までとし、原則として残業は行わない。③積極的に地域住民との親睦をはかる。等々の方針によって、同社にクレームが来たことはないそうだ。

3. 城南ブレインズの一員として

望月氏は、29歳から蒲田工業協同組合の「木鶏会」という経営サロンに参加してきた。メンバーには従業員が100人もいる会社の社長もいて、当初自分のような町工場は本当にやっていけるかどうか心配になったという。しかし、当時専務取締役だった望月社長が経営に対して漠然とした意識でいたところに、「会社の経営はできることから始める」「会社の規模に関係なく社長は対等である」「出会いを大切にす」「早く社長に就任しないと経営に取り組む時間が少なくなる」という助言や、「経営に自信を失った時、その壁を乗り越えるための努力はしているのか?」と言われて、はっと眼が覚める思いがしたという。

その縁から「城南ブレインズ」への入会を勧められ、木鶏会とは異なるメンバーの話も聞きたいと平成18年に入会した。



城南ブレインズ定例会

「城南ブレインズ」は会員企業の成長発展に貢献することを目的に、情報持ち帰り型のグループとして公社の呼びかけで平成9年3月に設立され、4月から月1回の定例会を開き、積極的に活動している異業種交流グループだ。定例会では自分と異なる業種を経営する社長から厳しくも暖かい提言を受け、今後の事業展開の参考になったと望月社長は大変感謝している。自らも平成21年度から副幹事長をつとめるなど、活発に活動中だ。

4. これからの望月塗工研究所

グローバル化により日本企業は量産品生産を国内から中国や東南アジアに続々と移転している。その中で国内企業からの試作品、短納期や特殊な注文に対応しているのは、卓越した職人技のある地域の町工場である。しかし、リストラや廃業などによって、多くの技術者や職人た

ちが中国・東南アジアの企業に再就職し、技術や職人技を現地の従業員に伝承している例も多い。このような中



「今を大事にしてほしい」と語る望月社長

あっても望月社長は「望月ならできる」といわれる会社づくりを目指していきたくと語っている。

社員に対しても「今この時を大事にして夢と希望を持ち、自分らしさを発揮することを心掛けること。そして、人からありがとうと言われる仕事をして欲しい」「誰も初めての仕事はうまくいかないのが常である。大事なことはそれをごまかさなで、なぜ失敗したのかをきちんと分析し同じあやまちを繰り返さないこと。その上で、次のステップに向かって進むための努力を惜しまないこと」と説く。

そんな社長は今後の方針として、「①さらなる技術向上による焼付塗装加工への特化、②製品1個からの受注、③人のやりたがらない難しい製品やより付加価値の高い製品に対応すること」を挙げている。職人が1人前になるには10年かかると言われているので、養成期間を短縮するためのマニュアル作成も検討している。

また、大田区内には、自分の工場ではひとつの作業しかできなくても、別の作業をするほかの工場と連携して製品を完成できる近距離のネットワークがあり、この「自転車ネットワーク」を積極的に活用することや、若手社員の採用・育成も視野に入れている。これまで四期連続で黒字を計上するなど経営は安定しているが、お客さまから「ありがとう」と言われる企業を目指して望月塗工研究所の挑戦はまだだつづく。

(城南支社 佐藤 和男)

企業名: 有限会社望月塗工研究所
 代表取締役: 望月 直人
 資本金: 300万円 従業員数: 4名
 本社所在地: 東京都大田区大森中 3-20-21
 TEL: 03-3761-0404
 FAX: 03-3761-0417
 E-mail: mochizuki7010@amethyst.bforth.com